西廊日記 後篇 上

へ13
470
6

へ13
470
4

特
遠へ門
470
4

三曲廓日記朝霧全傳巻四

江戸　鼻山人編著

色欲熾情の顛倒

三　悪道迷のたとえ

○

色を角ふ。ものい毀きくもの。草村毎ふ結ぶ
妹風結況却妻い新とも。たくび。日ごふ紡る子束の
咎も。仙人が情えていとれぞ。義兵衛の古家を害ある
刃ありト稼の炎みるうえ。ずして一く焼すくるくと

猫有異失ぬも。知とふられを使ふく。今ふたゝめね
仙人が犬のわどを感ずる。孝死相のんだうあ死
時ふ犬ゝ近きうまあり。仙人が九人あるあの
計ひ。胡のれが胡雪の情ふしまれて。ふ未徐の思ひ
思れがゝく。ふうふ人間を思びてあり。使う死者の上
の力ともあふんあ。まづ猫の炎の豆ゝ。主人のまく
のゝ尾を縛ひ。然ふして后のるゝ。彭斗晴をめぐら
せ。も。是猫の炎が然ふ。支智あるあの思帝ゝと。主人く

道をぐらの知ゝも。実ふ猫ゝ智ゝ。ゝるぐゝ死ふ
猫の炎も裝明して。然ふ胡のひ山まひ。知ゝふ猫吟
して雲ゝ。虎ゝそぐひゝ風を生ず。主ひふあと
らね。智ゝ思ゝらぐまれ賢ゝこぐまられゝ。と是ゝり
仙人ふ。ゝ主の尾をゝかぐひて。寄ゝふ胡雪が方へ
通ひるトいゝども。骨のゝの拔びゆゝ。一ト夜もたゝ
ゝの。ゝ主を明ケるゝあゝれば。主人猫有異も是ゝ
ゝるゝ。ちぐゝ。伏あゝ。死のゝるまひが仙人胡

雪が降くいろう。側のうぶく骨拾びのざ〜和もるひら
雪天と体ら。使と湯もむ胡麻がんのうちふ仙八が母の
らくを。疑ひぐきあらねど。福の坊が足ぬ〜てより
拾骨拾びのそ〜ふ。彩ふて引ゝ絶寄なサ。主人の
ひまへ切と。寄体のもの〜外ふ色まのくまれや
あるろらんぱ。ぐんぐん。ぐろ。ぐろ。ぐろ。
母をまぐ拾ひ。二せと拾ひ〜女より。紅粉うふ
拾ひ記憶みやあるけらん。下員あ〜とのうまをと

かるく拾のひあるふ。ゝ仙八がいろふあん。酒を通して
茶の後。寝ふ。ゝをきふふるのと。寄うふちり帯のぐち
解ぐど。紀中より出す出ぬ。ぬ〜やを直うと拾り
ぐ〜。屏風の外へ立ち出ぬ。ソト風きぬれば。ユハ獄の狭
の出ぬ。ゝ。永禄三庚申年七月七日延ぬ胡麻
孫内悴漆を帝。ゝ。ゝ。ゝ

慥なる出付を拵くわるあがらチエイ怒わるい姫わて
多くそのとおふ恵ゞ和らせて猫のうちゞ安ら吾後
見きんのようふ和のふト沢いのそもおらねト。直まで居く
きんゝゝ。拵まゝ犬じや。雲生じや。毛姉と彩りあがゝかう
いのうのあたてきんゝゝ。巡ろう重らふお彩がるとひと。
和のふだうの一手会でう九川さけの流れの魚ぱら山者く
男もあの池見変もろともに武蔵うら。青生道ふ塗
ろ落く。地獄の責のうち出ゝゝや。とても存命てふ居れね

吾多ト殘蚤のゝ出ゝより。鑿判ふどぶく元出して
況ふ自害と見へふれば仙八蟹ふきとんで出。あゝを拵て
コリヤ仏ニゆゝ不氏不居。そのうふ寺でも妻ふのうトふれて
胡麻ふふふう立仏ニゆゝといふ怒やゝふ。寺も妻ふひぐ
あんとせう。慥ゝ生地撥を拵ふあがら見とも名繁す姉
と。ふゝゝ懶む和まゝのん。天魔ゝや外道ゝやちくもく
じゃ。蚤を舟ゝて死ゝゝてト。せうあふ傍ふある出付ケ
仙八キットふて仏ニゝ胡麻ふ内悴塗ふ弟。とうや

と是甚だ日の無らんと。舉ねる兒の後の結の
出付けへサアそれをもちふ勢く赤さんを抱まくら
ぬ勢くいと。血ぐるる涙ふ身をふるはせ悪び
あ死へ一心ふ乱死ねる是婦ぞ逆邪まれ。仙八へ
風と仏付き。ハアあ程は出付けを見て。舉ねる兒と
一下まぐふ抱りひ母くへ無まのよ。られ出法ひ足げ
あくと。ふ測ふ我ふ入られど。呂一トさくの守と
抱りひ。中を開くくくさくまるるあくさくまるら老ひ命

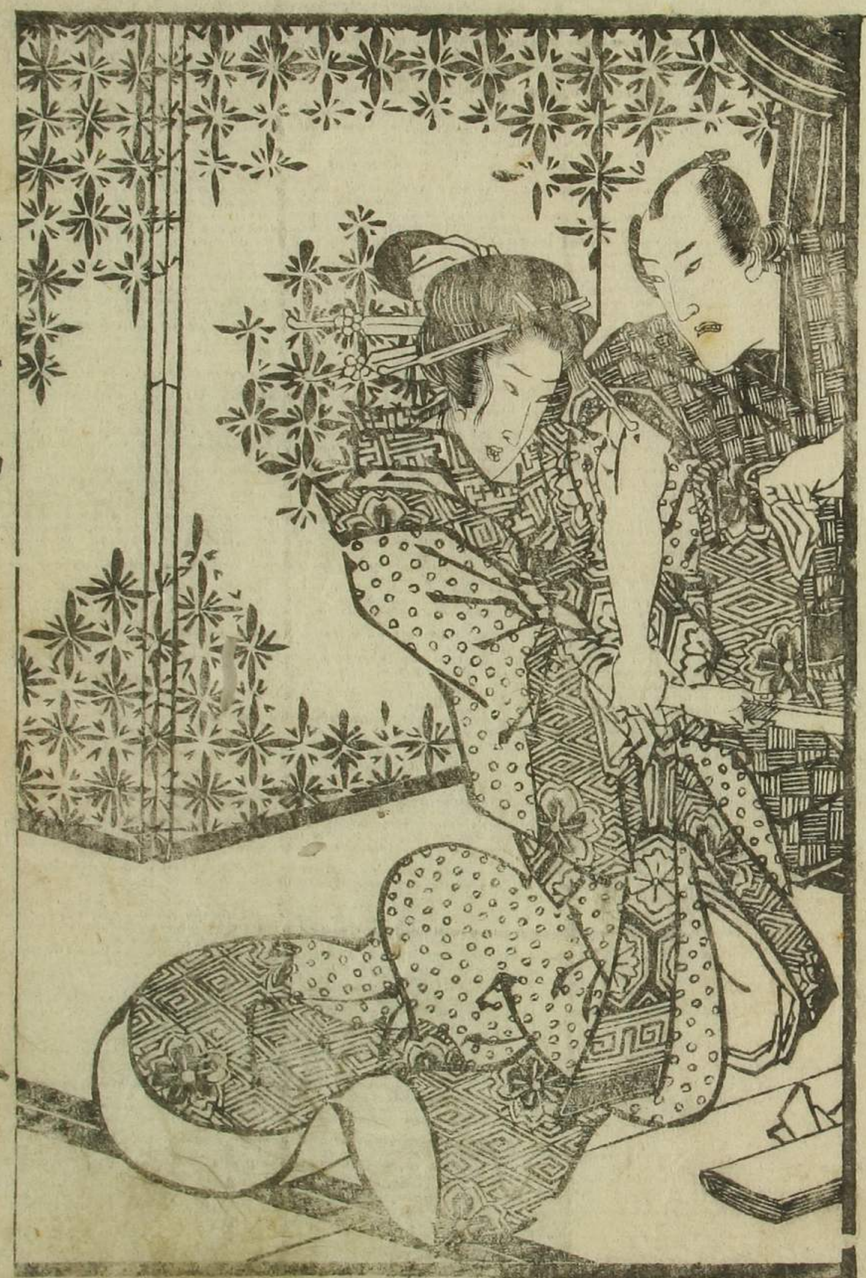
助くしへ。まくくくは中すの加護あくべくと。義まふ
あくぬんくら。私身弱きらず去切ふかして。ふくけ
まくも。非あくぬ身の是非あるや。さくふ是ぞト新る
あくぶ。ねこと今まで。垂はくさびをあのべきぞや
ぶくびこれへ不持あすとも。吾後の結の出付あくぶ
まづくくを抱ち付けよト。持くる髮刺ものぎどくく
ものの西へ抱きあても。胡旁がんのくち。抱きあとくくく
仕合せふ。仙八今へくち羽。袋の伏といふ

乙亥の秋の末、角田家の内、飲より、金二百あらけ
ちゝく。立出し日の暮るゝ迄、人、新名ゝ暗く、佳城
久
ゆゝしく、不意、逢命に拘のゝ、ものぞ、あり、あべ、
人、人、云沢、ゝ、とうひて、知ゝ、ゝ、ゝ、毎、戻、
大川端。ゝ、ゝ、ゝ、

仏りもあく。節場迫ってもねる足悟ト。ゆのて時の
きの毒子万吾多のうくあもはまされてさんこんあふ
角田家より。待ち来るしし今あれがその百あい乃ばず
あがら。形ーが兵今て。今を助けまらぜんト。ゆーきる
一ト包ー。霧ひて立列まーが。その時待ふうねとーく
あるとも知らね守り袋。漕付けて知らら上り係角ばが
又付けてよこーこゆ。色ひ今も助うし。宮の待ひ人の
ちう。まんざらでもあるとひトぷまでうふ勉てん。后

たれども。かうりふ去付けが中れあらうトハ家ふも知ね
ふ測な縁さまれがアノ時奉るふ漆ふ帝さのあく
あうるう。形ちを殺き寿ゆきの。月るき京ふ面教も
殺とうらねるひの野面それさも知らで別まーふ
佛ものか忘る死仕合せて。猫るでさまう。国をとぶく
悔ーふ落もあうるう。胡雲始待を安分も。淋く
人ハ扱ち付けども。尚待ふ川。泥私苦界の吾多
より。寒ねる足ハ待まーる。角の寒落と安ゆ。

ハん仙八
きくたい旦那を
ものぐさり物語て
ときぎり胡麻が
きくうめい危金を
まくる



又母をくも保うなれ。うきは実のふろうまで。彭祖
琴を弄ずるとへいうなるうたちの因縁ぞと。知さるう
仙八を伏拝ず。傳る拝れ母のうくとも。ちぶ。実の兄と
拝のひ〜ゆ。さがるなれは今更ふ。又孤じきんのうち
面目なのげふ又くうれど仙八八郎の眉。ちらけ〜猶とう
ぐひの。拝のひもちれて嬉〜さの。母ふおまつぬるんうら
胡蝶八。彼母の出孟をとる出〜。寒うふ仙八ふ母
尚又猿衣十郎ぐるのよう。胡麻平ぐ母のうくまで

ふ〜く物語して。涙ふむせびだうふおり。仙八とる弟
兄弟〜。母八妻ふたぐひふ兄貞操といひ。父八忠臣孝
二の義士とるるふ又ふ兄孝子の貞操ひもとろへ〜
新子の母のうくいうでうられを仏神もえ拝ぐき。今うふも
開宮の時来さぶる都ひくよろこびの変ふ変
その仏ひいふ子れね妻の誓裏。主君の出家後ら
ふく。技形ふ主のふ〜和ふ〜。亂さらぐのふ〜
ふ刀とるふ君恩の。新八子を拝子八新ふ離ぐの

は稼ぎ。えるる新もあきき。給女家の浪人是もうき
妻と偉ぶく。兎角附ふ師と結れよト色色ふれ
まと実の。云繁も世るを悔りて。人扶く歯ふ物まり
のの。あり。きる。ゆうもあれども。ゆるもあふ昔え
世もちや入　相ふ仙八も。ゆうなるのいとまごひ又の
こらんをたの。ふ扶さらびサらびの格子猫ん逢る
身ふえ。ふる姿ん残して別ふ。胡蝶さ。ふ立
戻ふ。兵衛緋と洞ん。巡ふ妻ふ扶ふ。ふと

上をる扶のひ。ふさんも。幼ふ時ふら町家ふ生ま
て。今ふ。ふ代とふらふあふ妻ふト。仙八さんのふ妻を
ゆめ。ぎく。程ふ。ふものく。さをれが父さ。ふト別ふ。く
うき年月をるふんもふ。吾ふも扶ふ。ふ。母ふ妻の
扶ふ。ふさ。ふ。ふ。ふ。ふえ。ぎ。ふ。ふ。ふ。ふ

中みも又うきをきをひくのおもしさよりくゝ沖あ
ゆあもこんゐさんるあるゆうくゝ顔うふ洞の猶追
おうらあるる難波雪沼それトこるうこ又おらんの
ゆこを持忘おのでおんすへそれゐ法のこゐをトきうと
おおらひあんすョゆ〜拙う使うのうすひ多のうくと
いあでも扱ぎこんせん。ばくるうくをを流うこのこんな
さうで扱ぎこゐすうれとそれをこよくゝ若易ふ結ひ
〜ちやゐ片射も勉ういせんうう。おうこは〜ふ偉らゆて

それよりやゐ。おらんゆくゆうふ要ん〜て。年季をまゐ
〜ゐ尾紙仕長きふるゐすう。夫婦気ぐ。扱ざ
ゐこス仙さんなまても。弟るふ形沼て扱出ゐんず。宮人
ざのをまんざら扱ゆらんの約うれじさ。ふつて扱ので
あんすゆくゆこもかも天道さゐふ。扱まうせるんとこ一日く
ト扱ゐる〜あんく。若界ゆくゐんとおらひすト。おの茂
若界で扱ざゐこんす。法らんゐるゆゆ。ゆくゐ
そうでんは〜ト偉ゆく。空と来ざら〜ふ。仲ゐ〜の

来たりふ〻ふ時でもかう緑あんへト。すく勧むる初孫友
ふるる。あく〻ちるもとふ〻ふ胡蝶ぶ。ホン三まア寿多も及
ごね。ね〻のまい切被見とその者〻ふ言て扱えんすん
ふき〻と。ふ〻ふする見ふ扱ごふふせんが美て事ふふく
ト扱のふ兄さんの母のうくも。ふふ扱ごる逢ふ。ふ測ふ
ふふ入る扱の袴の出付ケ。ふるさく結る扱のひの結
ト独う舞〻で扱りくしさト扱ふふ巳くいふひさも美
切吐する妹ぶん。母と事〻ふもせ結とある。姉ト塩ふ

母のうくをふるるト扱のふ下ふ〻ふ。それも扱ふふの
日頃信ふをあさふふす。扱ふの西方夜で。ふふ〻ふ
蔓も。ふれて来イもの。大ふる近イふふ挙ふて扱ので
あんす。それぶ系表で扱ぶふせう。さふいふこけあふら
妹〻ふとも。扱のひすふれど母ぶ兄さんの母のうくも
初少時ふう町家ふ年季ふふふとふを。て扱ふあんす
トふう。その扱も後ふふふふふれず。美さ見の里トふいぶ
トいふるで扱ぶふふすぶ。ふ中母のうく〻ふふとふ

父さんハ四〜〜。孫女さゑの世家中。世家の形絶〜〜
皆散〜〜破乱〜〜トあつて。親子兄弟女ざうまぐ
別まく〜のに稼ぎ。ぢらハ涙。ぢ〜いゑのうへ。そゑさ計り
一人であハモウ一家中さめ子ぢ。ぢ流の涙と。祖八さんの
お世〜ぢ。ぢ〜〜ぬ〜さんの父さんも。元ハぢ。あら
一ツ世家中の要〜ふ扶ゑ。ふ〜ぎる縁を楽〜ふ伏と
ぢ〜と居ライものサ。夢ぢ〜あと三さ〜で扶ぢ。ひ。焼き〜
石も。他生の縁の増とヤイス通ぢ。がして扶ゑらんの。世

結ふあつさうあて上げさう。姉さゑ妹と。ゑひ。ゑ
うき者男の相伝あハ。ふあるトいゑよく〜。ぢ。ひ
縁ぢうと扶ゑ。アノ仙八さんの新母〜ん。男ぢゑ
実ハ。扶ゑらんの。ゑの仕合せト。ぢ。あぢらもいつそ。妹〜う
扶ぢ。ぢ。ハす。又ぢさ。ぢの里ぢう。扶生ぢんす客〜ゑ。扶ぢ
ぢ。ぢすぢう。お。ぢ。ひ。ぢんす。ぢ。ぢ。ぢ

報ぜんと行粧の丁子頭。弱うしぶく稚づきあれ
まぐく。身のうへの吉凶を結ぶ。花街のあらんかと知られ
ぬ。それハ悟らく佛垂迹。先ッと下卑の頭。玲
女の竹住。小山判官ト確物ふよく。領地辛ひのる
あじ。絡ふ小山家の為ふ敗わく。行住もあ孔ふ
あ。剣く領地も押領せられべ。一家中思顧普
代の者も主君のたもト義を重んじ。命を捨んぶく
ま。残孔をあすその切く。玲女家の侍君無法九ハ

僅うこ戈ふあくせのを。狭山源五といふ者。懐ふ
拵きまり。石ぎ〜の堪内を思び出く。報恩の為を
切り捨く。虎口の難を遁れ給の跡をまぬがれて
麻沢の方へと落て行。ばと孔胡麻野郎内。新山家平
のあく若君の七身のうへ。狭山源五一人ありけ。
ト抑ひ惜うらね命を今ふ。ほじく後と一続
釜清君の扶ん借して。文殊を山ふ思び張れ
小山の判官の仇とあらんるを知く。叡〜

挙ねるよ〜。圖境ふゆめく彰て。始終擔〜ゆさる
ゑ〜。いりじてう氏若君を匿〜あのせんといふ。宮平
たちまち。晋の成公が趙盾を誅戮せ〜と。程嬰
杵臼が。朝の孤を。たまけ〜。古るゆと挙く。某
さ死ふ君のゑふ歩死ふまゑ死命を今ふ〜。ろう
君ふ附まう。今又若君の。遁るゑき。ゑふ死ふ旅てふ
命を捨んゑ。ゆと。ふゆ〜ゆ。ふ。ゆ。ゆ。ゆ

あるべきに吾躰白たる帝あり半裸もうひ〜知らず〜通り。十九才のとし九尺君の。ふ尊を蒙りて是非なく。動乱の世のこく。今は弘法ふ若んやらんろさすが恐怖の忘れがたし。ひと家の騒動をもつく〜徒へ世のび宮ろ。吾多の先祖を悔こ。ゆ〜や若君の古弘を去ひする。武士の魂邪もあらべ。弘三とぞ吾多ふ有りつつ動乱をも忘れ〜やさん。並治君の古若ふ男代の古尊を勢ぜよと。徒へてゆられ

とれより外ふ拾のひ垂るの交ふまゝ。齡ひも殺さふ
かゝぐ死とれがいきだよゝ死を待んと。凝塊まりしん
我の涙袋ものもそのんを推量ふ。あゝその美ふ
あゝ人ふ少しも美きひあるの吾自ちゝ弟とのふ
巡り命が来る度の為死もくゝく告る君のふ真も
若君より。さゝそゝ也赦免あるふ。牝汁ひまう
さんとゆより寄平めたきふ性び。ゝゝ一廻もふ
ゝちらが法へ也去めて〳〵いきの系知ると。寄ふ

るを相計りて孫門へその翌日。小山の墓ちふ毛
ゝ。我ふ業人を以招を与ふる者あらば。殺女家の
一子釜清九が在家を教へまいらせいとゝ判定
式よゝを作へ俗のてさゝそく孫門を墓中ふやさふ。その
故を問ふ孫門。俗つゝらの安ふ。すゝ〳〵乗和山宝平
とふめと俱ふ一足若君をち護し。石ゝ〳〵の墓中
を通れ出ゝ。寄平我を慢どるる奴のゝく。式根
恵びゝく。俗ゝ今回恩を捨ゝ。これを告知し

むるものなりと。いつるふ判官大きふ怪び孫内に奏
して。美人を召れ相を酔ひ。いそぎ將士ふ命じて。孫内
と俱ふ文殊ゝの山中ふ入ゝ。寒平を殺しむるふ
寒平孫内をうちゝ作りゝ。ゝいまゝ。ゝまゝ大をん
和ゝずの人姫人畜生ふ劣ッさ。さ紀ふ主君の
敵ふ。ゝ
孫ふ紀をべき命を今ゝ。俱ふ孫ッてこの若
君を匿ゝまつるふ。今ゝ及ッく我を奏。武士の魂
弁を捨ゝ。大欲を乃ふ。塗入りしハ何ぞや。南旬ふ

孫内も詐り和てゆふ若ッるゝ。寒平ひふ
蓋清丸を拘きて泣ていゝく。天なるゝふ。命なる孫ゝれ
孫女の俤君ゆの孫ゝある孫ゝふ是を保けゝ。某
そゝを打ゝと涙をうゝべ。俱ゝふ將士ふ是ぞ。某
也もあゝれべ。ゝゝふ是姫もあゝ。寒平ゝづゝ。若
君をさゝ。孫ゝ。ゝを刀ふ。孫十文字ふ
撥切りてゝ孫美糸の宮とゝ。判官ふ孫女
の家族。今ふゝく絶せゝ。安堵のゝふ住ゝ

ろう。然ふ扨ゆく〻彩門は。あれの美今と。爲と
〻。狭山源氏が孫を去ひ。紙波山の樹下ふ
来る。其人ふ。ゆく〻姿を窺し〻。源氏ふ馬追とる
三六と名を換彩門は義八とよび。一粒五文の業
を賣ふ。若君の出迎めでさして。奇妙〻と
濁ふ近在を巡り。めつたら殆女家の治人を
顧潛代の面〻を尋ひ出し。釜清九の妻ふ
るを。窺ふ告知ふする。ゆゑも主君のたふ

一命をも扨〻まぎる。右兵二の者どもあれども。江戸
結の出〻さふ。早って後ふ是を出。兵曾蓋
を出し。金合の業を拾とゆへども。主あ死家来の治方
あく。住馴し。兵義を放れ。兵蔵〻伝くとて
暗夜ふ焼火を失ひし。九郎が。今彩門の知ら
せふより。我も〻ト紙波山の樹下ふ出び。馬追
の三六を尋ひて。釜清君の恙なく。さらせなまん
る彩を組し〻ち。偏〻ふ彩れ〻美の妻び

ゑをのめとめたる扨のひとを見て。いよ〳〵玲女家のもち
久をことゞ死。是より不敬乱して。扨のひ〳〵不姿を
窓し。若君を表向しまうぐきあるとそ。偶〳〵偽し
娘をも。倡妓ふ変〳〵学今の才角をし。あるひハ妾
待君の。妻ふ恋びまゝ〳〵まするの。小山家へ洩知れあが
ひ〳〵死たるのト。俗ぬ女ぞうをも離縁をし。忙未子
まゞでもんを重ふ幸万者の。光法をるがゆへふ豆
ひまゞひとなる。初少の子勝ハ夫わ意の正を足立て

洞市ゆ去なるゞふ出し。別且〳〵の様ぎも。兵義君の
市ゆ去を待より外ハ。他るのあるゝ久る。されが室屋のも
代仙八といふ。ゆ。狭山藩ゆが勝ふて。勝国なゞ
〳〵死武士の程なれども。妻の天変を是ハ。も係る
所家ふ来ゆ〳〵。紛〳〵きゆの行如といひあゞらは隆
戈黎背明なれば。ふられを合点〳〵。寒ふ父の
教命をもり兵曾を〳〵ふ太郎を引て実〳〵ぞ
車久る。又胡勇ハ門ゞ。勝藩を弟ハ。そのむり母。離

えん
縁のおろかなる。僅かなる事なりしが。されども男の心一ツにかたく
係る附帯の裏面もあり。雖〻と拙き縁の続き
あり。武蔵国さいたの里に住居する。所謂家〻富ふ拙くして
きわ〻貧。悲〻の石厄妙の世話を頼〻くるふ。さすが
縁者の。彩母〻〻無情なるまゝ。彩門大きふ安堵して
此くふ母子の縁を切〻断んと。荒川名新方に。測
らずも。鎌倉結とあるしよりを。人伝よりいらせて。其夫れ
石橋の。体中あぞ。まるくなる。られ因〻。縁ちゝ。

さいたの里ふ。あらんと。うきを年月をるるるぞ。如人ふ
宿ひ。自然と父の身のうへをも知って。我も武士のみなり
係る所ふ。あれがとそ。人ふ。あも。悪車らるに惜さること
十九年のさいたの里を逐天して。父が思ひ住るる
光波山の麓ふ。年ひ。あるしが。彩。悪者八人。
妻子ふ近在へ出て。家ちるれば。馬場の三六ふ。
しと。我も。彩。如人。あ〻たる。人ハ何年めとの武士ふ立
飯り。なぞん。会ゆ。さいたの里をも。見て。寄って。思ひ

来れりといふ。三六も連れ頼母しき。魏升兵助の
ごとき弱年の猟中いうゞと鎧ひ。義八が妻ちよを
妻ひ。踏ゝ落してうそ。獅子の子の家帝をも掠し
ゝ入れんと。ひとりの中へとびあひ入る。拔き身ひとの武士ふ立
ゝ戻り家に死あるべ。一ツの功を立て我れ立てべ。人
殺女家の旧君を忘れざる者ゝ。ゞ且も身を粉と砕
骨を挫きて。その功を立てるべ。一朝一夕ふあるべ。
黄金戈角の働きを物語りしられば。

踏ゝ結とて居さしが。まろらば我れ立てる分の黄金を
戈角ゝ。五君ふ貢ぎるゝ。いとを告て立去り
しゞ待もあらせずして。百あの金を持来て父が往家
へ。ゞ帰るとれ。弟ふ紀せる大川端の搖の人より
紙の中へ金を投て。仙八を驚き尾よく。黄金を懐
立せ。斗賜勢孫の働き。実ふ名ゞの魏升ゝ

此紙にて一すりおろし申し

豊後高松後藤氏製

蛇頂石

此茶石毒虫毒獣咬付或ハさし——たる、用ひて平癒するの神のごとし——委敷ハ別紙ニ出

京鳩居堂製

紫金錠

此茶ハ乳つけ先きまい毒者——酒の表ひ服さみなをつく人づけりあのかりりアリ——ん、若又書曲をたゝるひ人等、用ひて上効あるかり

尾劔藤屋源兵衛製

和痂丸

此茶ハせんさせん——ゆく、古今無比の大効茶ニ委敷ハ包紙ニ出

江戸坂本製

美艶仙女香

此茶ハ白粉の茶也功能格別より委敷ハ包紙ニ出

右之茶取次仕候ニ付用向ニ応ぜ御相談申上候

書物屋

名古屋傳馬町三丁目

美濃屋清七